



TITLE:

ジャマイカと日本における「生き方」としてのラストファーストの変容に関する文化人類学的研究(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

神本, 秀爾

CITATION:

神本, 秀爾. ジャマイカと日本における「生き方」としてのラストファーストの変容に関する文化人類学的研究. 京都大学, 2016, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2016-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19799>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により要約は2016-07-22に公開

(続紙 1)

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	神本秀爾
論文題目	ジャマイカと日本における「生き方」としてのラスタファーライの変容に関する文化人類学的研究		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>神本秀爾氏の博士学位請求論文（以下本論文）は序論（第1章）、本論（第2章～第10章）、考察と結論（第11章）からなる。本論の章題は以下の通りである。第2章「調査地とラスタファーライの概略」、第3章「エチオピア・アフリカ黒人国際会議派の概略」、第4章「エマニュエル死後の経済活動の変化」、第5章「会議派系ミュージシャンの信徒らしさ」、第6章「ディアスポラ黒人中心性の揺らぎと存続」、第7章「日本のラスタファーライの概要と展開」、第8章「ラスタファーライと日本のルーツとの接合」、第9章「ラスタになり、ラスタとして生きる」、第10章「ラスタファーライを介した地域への愛着とまちづくり」。本論は、大きくジャマイカの事例を扱った第Ⅰ部（第2章～第6章）と日本の事例を扱った第Ⅱ部（第7章～第10章まで）からなる。具体的に述べると、第Ⅰ部では、ジャマイカのラスタファーライ宗派、エチオピア・アフリカ黒人国際会議派（以下会議派）に焦点を当て、宗派というまとまりが保たれているメカニズムを明らかにする。第Ⅱ部では、日本人ラスタたちの脱地域的なコミュニティを対象として、彼らが地域住民に受け入れられ根づいていく過程を明らかにしている。</p> <p>本論文の目的は、ジャマイカで生まれ、グローバルに発展したラスタファーライという社会宗教運動を、ジャマイカと日本でのフィールドワークにおいて収集した資料に基づき、その実態と変容を明らかにし、さらに日本人にとってのラスタファーライの意義について考察することである。ラスタファーライとは、1930年にエチオピア皇帝にハイレ・セラシエ1世が即位したことを受けて、ジャマイカで始まった社会宗教運動の総称であり、これまでに、ラスタファリ・カルトやラスタファリ運動などと呼ばれらわされてきたものである。それは、圧倒的な白人優位の社会体制のもとで、虐げられてきた黒人たちの地位向上と社会変革を目指す運動で、アフリカ帰還が重要な活動となっていた。</p> <p>理論的には、文学研究者のメアリー・ルイズ・プラットが提唱したコンタクト・ゾーンという概念の検討を目指している。この概念は、文化の動態性を理解しようとするものであるが、プラットにおけるコンタクト（接触）は欧米とアフリカや中南米との関係にとどまっていた。これに対し本論文では、ジャマイカで始まり、ディアスポラ黒人を中心とした、全世界的なネットワークとなっているラスタファーライを事例として取り上げ検討することで、コンタクト・ゾーンが想定している欧米中心の視点を批判的に検討している。</p> <p>序章では、目的や理論的視座が述べられ、さらに先行研究が検討されている。第Ⅰ部で扱う会議派に関する先行研究の問題点は、創始者のエマニュエルが提示した理念</p>			

が、彼の死後どのように変化したのか、また、信徒の多様性そのものや、信徒間や外部とのあいだで生じている葛藤や困難、摩擦についてもほとんど言及されていなかったことにある。そのため、人びとが理念と折り合いをつけながら生きる生活実践が十分に描かれていなかった。そこで、本論文では経済活動やミュージシャンの出現に注目する。第Ⅱ部で対象とする日本のラスタファーマーライに関する先行研究の第一の問題点は、日本におけるラスタファーマーライの土着化が主たる課題であるため、ジャマイカのラスタファーマーライを超越的で一枚岩的なものと位置づけていることである。第二の問題点は、日本のラスタファーマーライの土着化と宗教的・スピリチュアルな文脈との関連が十分に考慮されていないということである。

第2章と第3章では、それぞれジャマイカおよびラスタファーマーライ、そして会議派の概略を述べている。第4章では、会議派の拠点であるボボ・シャンティに暮らす信徒たちの経済活動について、個人化という視点から考察している。さらに、会議派信徒たちは、会議派信徒を称するレゲエ・ミュージシャンによって拡張された、会議派と外部社会とをつなぐネットワークを利用することで、エマニュエルの死後求心力を失っていたボボ・シャンティを再度権威づけ、ネットワークの再編を試みていると論じる。第5章では、レゲエ音楽に関わる多様なミュージシャンを分類し、会議派のミュージシャンたちが排他的な態度を避けることで社会的な成功を目指していることを明らかにした。第6章では、ボボ・シャンティで暮らす信徒を主な対象として、ラスタファーマーライにおいて重要な概念である「黒人」や「アフリカ（人）」が会議派においては多様化し、揺らぎつつあることについて検討を加えた。出身地や経験の異なる信徒の参入が進む会議派にあって、人種や国籍による分断や排除が存在するものの、ディアスポラ黒人の特権は絶対的ではなく、信徒たちはそれぞれに、経歴などに照らし合わせながらエマニュエルの教えを体現していると指摘する。

日本のラスタファーマーライを扱う第Ⅱ部ではまず、第7章で日本におけるラスタファーマーライの展開史を、レゲエ史と関連づけて3期に分けて論じている。第8章では、日本人によるラスタファーマーライ理解の特徴を考察している。すなわち、日本では、神話やアイヌ文化への憧憬などのニューエイジ（精神世界）の要素とともに、ラスタファーマーライにおける自然やアフリカとの関係が注目され、日本人の起源が再解釈されていることを明らかにした。第9章では、日本人ラスタのラスタファーマーライへの参入経緯の変遷と、解釈および実践の相違について論じている。具体的には、6名のラスタのライフヒストリーと彼らの事例から抽出された特徴について分析を加え、日本人ラスタたちは、グローバルなラスタファーマーライ・ネットワークへの帰属感と一体化願望を抱きながらも、非ラスタと共感するための回路を開いていることを論じている。第10章では、日本人ラスタの実践の一つとして、ラスタと非ラスタが協働して行った地域復興の歌づくりを分析している。

考察と結論では、これまでの議論をまとめ、先行研究の問題点を確認するとともに、プラットの提案したコンタクト・ゾーン概念の可能性を指摘している。

(論文審査の結果の要旨)

本博士学位申請論文(以下本論文)は、ジャマイカと日本におけるラスタファーマイという社会宗教運動に注目し、その理念と実態、変化、意義などを、詳細な民族誌的資料に基づき論じている。本論文の評価すべき点は以下の3点にある。1) 対象と方法の独自性、2) ラスタファーマイ研究への貢献、3) 日本のサブカルチャー研究への貢献である。

1) 対象と方法の独自性

20世紀初頭に生まれたラスタファーマイは、エチオピアでのハイレ・セラシエ1世の即位式を契機として生まれた。ただし、その思想的な背景は19世紀における黒人たちのアフリカ帰還に遡る。このアフリカ帰還運動については、ジャマイカに限らず、英国や合衆国でも盛んに論じられていた。また、ラスタファーマイを考察する上で無視できないのは、1960年代後期にジャマイカで生まれ、1970年代に世界的に影響を与えたレゲエ・ミュージックである。日本におけるラスタファーマイの受容もレゲエの影響を無視できない。本論文は、現代社会のグローバル化を先取りするような形で世界的に展開してきたラスタファーマイを取り上げている。まず、この点に注目したい。長期のフィールドワークを主たる方法としてきた文化人類学は、どちらかというところ村落調査などを得意としていて、グローバルに展開するラスタファーマイのような研究を避ける傾向があった。調査をしてもその一部(ジャマイカやアフリカ)の調査に留まっていた。もちろん、ラスタファーマイについて網羅的に研究することは、時間的な制限もあって不可能である。しかし、本論文はジャマイカだけでなく、日本をも研究対象にすることで、ラスタファーマイの世界的な受容の実態の一端を明らかにすることに成功している。本論文で採用した多所的民族誌(multi-sited ethnography)は、ラスタファーマイに限らず、グローバル化する現代社会を研究する際にきわめて重要である。本論文の先駆性は、グローバル化についての代表的な論文集、三尾・床呂編『グローバリゼーションズー人類学、歴史学、地域研究の現場から』(2012年)においてもまだ文献資料と一点集約型の論文がほとんどであるということからも明らかである。

2) ラスタファーマイ研究への貢献

本論文を特徴づけているのは、ラスタファーマイについての行き届いた考察である。それは、従来の文化人類学の学術的な地平をはるかにこえた多彩なアプローチに基づく。ジャマイカにおけるラスタファーマイの経済活動、その実態と変化、レゲエ・ミュージシャンの戦略、非黒人や非ジャマイカ人の排除と包摂などが丹念に論じられている。また、日本については、ラスタファーマイの歴史的な受容過程、それに対応するラスタファーマイ観の変遷、また地域復興などに関わる具体的な活動などが論じられている。日本については、特定の地域におけるフィールドワークではなく、ライフヒストリーを主たる方法として、代表的なラスタにインタビューを行っている。

これらの包括的なアプローチを通じて、本論文は現代社会におけるラスタファァーライの性格に迫っている。従来の研究は、社会学的なものであっても、貧困や差別などに注目し、初期のラスタファァーライの発展過程についての議論が中心であった。これに対し本論文は、創出後80年以上経た現代のジャマイカや日本のラスタファァーライの実態と変化を一次資料に基づいて提示し分析しており、その価値は大きい。前者については、すでに申請者による英語での論文が公表されている。後者についても、先行研究がないわけではないが、ニューエイジや精神世界（スピリチュアリティ）との関係など、日本での宗教的文脈に基づいて論じている点が独創的である。

以上から、本研究は、ラスタファァーライについての良質な文化人類学的研究として位置づけることができる。

3) 日本のサブカルチャー研究への貢献

本論文は、ラスタファァーライを対象にしているが、レゲエ・ミュージックおよび日本のラスタファァーライ一般を、ともにサブカルチャーと考えると、本研究は、サブカルチャー研究としても十分な貢献をしていると評価できる。レゲエについては、ラスタファァーライとの複雑な関係を詳述している。これはこれまでのレゲエ研究には認められなかった新たな視点であろう。また、日本のラスタファァーライについても、ジャマイカとの関係だけでなく日本における精神世界の中に位置づけ、さらに地域社会との関係にも目を向けることで、日本人ラスタの心性に迫ると同時に、日本のサブカルチャーを閉鎖的な集団と捉えない独自の視点を提示することに成功している。

学術的には、先行研究の読解などにおいて不十分な点があるが、本論文はその対象と方法において独創性に満ちたすぐれた学術論文であるという点で調査委員の意見が一致した。

以上を総合して本論文は博士（人間・環境学）の学位に値するものと判断される。また、平成27年6月3日に論文内容とそれに関連した事項について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降